

(論 文)

総合社会学再考

— 福武直の1940年代中国農村調査旅行 —

今 井 隆 太

キーワード

福武直 中国農村社会 社会調査 総合社会学 1940年代

はじめに

福武直と中国農村調査との出会い

「論文^(注1) もすませて肩の荷をひとまずおろしたころ、何とか父の厄介にならなくてもすみそうな話もちあがった。十二月下旬、私は、今井さん^(注2)と林さん^(注3)が興亜院依頼の中国農村調査をひきうけるので、四月からその研究助手として手伝わないかという誘いを受けたのである。助手として手伝え、調査出張費から手当を捻出してやろうということであった。この話が、私の研究生活の方向を決定することになった」(福武 [1976: 43])。福武直^(注4)は、中国で農村調査に関わるようになったいきさつを、以上のように回想している。それは大学を卒業する前年、1939年の暮れのことだった。後年のかれは、社会調査のオルガナイザーとして数々の業績をあげるとともに、東京大学生協同組合、東京大学出版会などの事業に積極的に関わり、「東京大学事業部長」の異名をとるほどになる。1976年には、定年退職に際して著作集を刊行した。その著作集に別巻として収められたのが『社会学四十年』であり、上のような回想が記されている。さらにのち、著作集は増補され、回想録もまた増補されることになる。みずからの軌跡を語り遺すことに、強い意志がうかがえる。

1939年の時点に戻ろう。冒頭の出来事が、福武にとって唐突であったのは、かれが理論社会学を専攻して来たからだ。「当時の社会学科の学生は、私のように理論研究を主体とするものと、地下にあった調査室に出入りして実証的調査研究に参加する人々と、左翼運動に多少とも関わりをもち社会学を軽視する人々たちにわかれていた。私は、どのグループの人々ともつきあった。調査室にも降りていったが、雑談したにとどまり、実証的研究には参加しなかった」(福武 [1976: 35])¹という。「学生当時の私は、もっぱら理論研究に集中していた」([1976: 35])。かれは、「戸田さんの家族研究も、不遜にも矮小な問題として評価しなかったし、林さんの人口理論にも関心をもたなかった」(同)、かわりに講師として来ていた松本潤一郎(1893-1947)を熱心に聴講した。興味を持ったのは、マックス・ウェーバー、マンハイム、フライヤーであり、アルフレッド・ウェーバー、シェラーなどドイツの社会学者の本を読んだ。ほかにジンメル『社会的分化論』や、マッキー

バーの『コミュニティ』を興味深く読み、フライヤーの『現実科学としての社会学』、およびマンハイムの『人間と社会』は翻訳すら企てた。冒頭の引用で言及されている「論文」は卒業論文で、社会学方法論を扱ったものであった。

福武はさっそく、中国関係の書物を読んで予備知識を得るよう努める一方で、先輩である牧野巽^(註5)に相談。勉強の一環として、ギャムブル(Gamble, Sidney D.)の『北京の中国家族生活』(How Chinese families live in Peiping)を翻訳することを決意する。そうして翌1940年3月末日には、華中蘇州を目ざして、東京を旅立った。

上海に着いたのが、翌4月1日、今井時郎を待つ間、興亜院の華中連絡部に赴き、東大社会学科の先輩増谷達之輔(戦後東洋大学教授)の案内で街を歩きまわったり、満鉄上海事務所を訪ねたりした。当時、中国は日本占領下にあったが、「中国の徹底抗戦に対して日本の非科学的精神主義がどのように太刀うちできようかという不安をどうすることもできなかった」(福武 [1976: 45])という。福武の手伝う調査研究は、「隣保集団の調査にもとづく対支文化工作の研究」であったが、「対華文化工作などという大それた課題がとけるとも思わなかった」かれは、「とにかく中国農村を少しでも深く理解し分析してみたい」と考えた。

福武の思惑はともかく、調査の趣旨は「対支文化工作」であり、調査の委嘱主体は興亜院であった。次章でも扱うが、戦前の中国調査には軍事目的の調査と、非軍事の調査とがあった。軍関係の調査機関を統合したものが興亜院から大東亜省へと続く系譜であり、後者の代表的なものが、少なくとも設立当初は鉄道運営を目的とした満鉄(南満州鉄道株式会社)調査部の調査だった。軍関係の調査機関(特務機関)を統合し発足した興亜院の調査は、元來作戦立案のための調査である。その「調査」には「諜報」、あるいは「宣撫」のニュアンスがある。「文化工作」は「宣撫」であろう。当時の時代状況を考慮するならば、「東亜協同体論」に基づく、「日支満」共存安定のための調査であったとも考えられる。あるからこそ、同種の調査対象地域としては珍しい、満州国の域外、蘇州郊外が選ばれたのではなかったか。

さて、上海で合流した今井と福武は蘇州に移動し、寒山寺ちかくの江蘇省呉県楓橋鎮第十一保、および第十二保を調査地に決めた。最初の調査では、鎮長から戸口調査表(住民台帳)を借りて筆写し、傍ら蘇州の街を歩きまわった。「蘇州の街では、義荘や同郷会館や同業会館などを、ゆきあたりばつりにみてまわった。その間、特務機関がつくった呉県合作社の人たちに、付近の町や村を案内してもらったが、それは調査のためというより名勝案内のようなものであった。しかし、いずれにしても、見るものすべてが珍しく、中国研究への意欲をかきたてられた」(福武 [1976: 46])。このときの蘇州滞在は10日間ほどだった。

戦前日本の社会科学において、台湾、中国大陆、朝鮮半島、そして南方諸島における調査は、植民地統治のための政策立案の基礎であった。そこに植民地社会諸科学の存在理由もあった。それはひとつのジャンルでもあった。台湾総督府、南満州鉄道株式会社等の機関には調査を担当する部署が置かれ、専門家が配置された。そのなかで、社会学が加わるのは比較的遅く、1920年代からである。その理由は、よく検討しなければなるまいが、戸田貞三がアメリカ社会学における調査方法論の重要性に気づき、これを学んだのがちょうどこの頃であった。

戦後になると、植民地調査の必要性は消滅し、日本社会を対象とする社会学は、海外に向ける目を閉じてしまう。そこで調査研究は、内なる植民地、すなわち農村へと向かう。そこで調査者の動機を構成したのは、農村の民主化であった。農地改革の時代である。福武は、戦後の多くの農村調査を主導することになる。

社会調査という異文化接触

ところで、日本で初めて社会調査方法論の書物を出した戸田貞三ではなく、福武に着目するのはなぜか。それは福武が、戦後日本の社会調査において、学術的調査のオルガナイザーとして名を残した社会学者だったからである。戸田は社会調査法のパイオニアとしての価値はあるが、戦後の社会学に持った多大な影響において、福武の方が大きな存在であるといえる。

まず以下の引用をお読みいただきたい。「近代日本社会学の形成確立と戦後日本社会学との関連、それらの連続と断絶といったテーマはこれまでも単発的に論議されることはあっても息長く、充分には深められずにきた研究テーマであるといわなければならないだろう。近代日本社会学の草創や形成におけると同様に、戦後日本社会学の展開や再生の過程においても在来的側面と外来的な側面との巨視的な複合的な文化接触論的な考察が深められなければならない」（川合〔2004：267〕）。

ここで言われている在来的側面とは、戦前日本社会学の独自の達成を指すのであり、外来的側面とは戦後、日本に流入したアメリカ社会学の影響をさす。筆者がここで指摘したいのは、戦前日本社会学の達成のなかに、いくつもの隠された異文化接触の局面が存在したことである。「隠された」は無論、大げさな言い方ではあるのだが、それにしても、従来、あまり問題にされてこなかった側面に、中国農村における「フィールドワークから学ぶ」という局面があった。

当時は日本の社会調査の、同時に社会学の転換期だった。戦後のアメリカ社会学受容が、単に敗戦という異文化衝突の結果にとどまらず、それなりの必然性をもっていたとみるならば、40年代の状況を詳しく見ておくことは重要である。社会調査の大規模な展開は、高度経済成長と歩みを共にした戦後日本社会学の大きな特徴であった。また「社会調査士」資格の創設に見られるように、社会調査のリテラシーが社会学を学ぶ者に向けられるまなざしの枢要な側面を構成する現代にあって、黎明期の光と闇を直視しておくことは重要であろう。

社会学のみにはとどまらない、大方の社会科学に共通の問題として、日本は20世紀の中葉まで、対外進出の国策に則った国際志向を持っていた。それが戦後、一転して鎖国状態におかれる。国が戦に明け暮れていた時分には、ナショナリスティックではあっても、大アジア主義の影響を受けた。国が占領軍によって解放されたあとでは、社会諸科学は世界を志向する門戸を閉ざされてしまって、ドメスティックになっていくのである。閉ざされた門戸の一枚には、いわゆる「鉄のカーテン」も含まれていた。

第一章 日本の社会調査の出発

社会調査とはなにか

さてここで、「社会調査」を定義しておこう。社会調査とは、「一定の社会または社会集団における社会事象を、主として現地調査によって直接に観察し、記述（および分析）する過程（安田三郎・原純輔、1969『社会調査ハンドブック』有斐閣）であるというのが、教科書的な定義となる。社会調査の定義は、どの立場から見るかによって、複数の定義が可能であろう。

社会調査には、広義にみる見方と、狭義の見方とがある。広義の社会調査には、学術的調査から、国勢調査のような人口統計調査、マーケティング・リサーチにいたるまで、多数の形態がある。分類の基準はいくつかあるが、学術的調査と実践的調査、質的調査と量的調査、などの分け方が普通である。学術的調査には、政治学、経済学、社会学などの社会諸科学や、考古学、音楽学などの人文科学も用いられる。実践的調査には、官庁統計の基礎となるような調査も、商売繁盛のための調査も含む。

狭義の社会調査は、社会学の理論に立ち、仮説を検証する、あるいは定説に疑義を呈する機能を

もつ。社会学の立場に立つと、近年、社会調査の定義は、だんだん狭い方向に向かいつつあるようである。さらに細分化され、そのうち福祉に関する調査は「社会福祉調査」と限定語をつけることが一般化している。こうした志向をもつ社会調査は、今回の報告対象となる1940年代には、はっきりと存在していなかった。社会学に基づく調査の黎明期、ということになる。

社会学的社会調査の黎明期

1930年前後に登場しはじめた、社会学に基づく社会調査が、40年代に入って地歩を固め、戦後一気に開花する。そういう見通しをもって、ストーリーを描いてみた。戦後の直前の状況は、まさに開花寸前であったかもしれないし、失敗続きの悲惨な状況だったかもしれない。いずれにしても、思想、学問の自由が認められた戦後、社会学者による社会調査が盛んになったことは事実だろう。

ではどうして、戦後に社会調査が盛んになったのだろうか。調査には方法がある。社会学を用いた調査と分析の方法には、社会学固有の関心の持ち方が反映する。社会学とは、格差に敏感な学問だ。社会学の描く幸せというのは、格差がなく平等な社会である。このような社会学に、学問の自由が与えられたのが、戦後日本の社会だった。

戦後結成された九学会連合の調査が、最初に対馬に入った理由として、戦前には、軍事的な重要拠点という理由で、調査することが叶わなかった場所だったから、と記されている（九学会連合調査会 [1954：あとがき]）。つまり調査をして、対象となる地域あるいは社会集団の状況のなかから問題（たとえば経済的な「格差」）をあぶり出し、報告書にまとめるということは、地理的、文化的状況の総体（なかには軍事機密も含まれる場合がある）を描写し、秘密もなにもさらけ出してしまうことになる。つまり社会調査とは、すぐれて民主的な行為であるといえる。これも、戦後に社会調査が盛んになった理由のひとつである。

もうひとつの理由が、大学の大衆化である。戦後の教育改革は、高等教育の普及を拡大した。旧制の大学にかわって、新たに国・公・私立大学が設立され、日本の人口増加にしたがって、定員も増加した。社会学を学ぶ学生も増えると、その学生たちを動員して、社会調査実習を実施する余裕が生まれた。戦後日本の社会調査史は、こうして増加した学生たちによって担われたのだった。

では、学問の自由が認められ、動員できる学生が増加すると、ただちに調査研究が始められるのだろうか。調査研究で最も大切なのは、調査設計の段階だと言われる。闇雲に手を伸ばしても、役に立たないデータしかつかむことはできないからである。

戦後の学術調査は、どのようにして準備されたのだろうか。その答えのひとつが、戦前の満洲国を含む中国大陸の占領地域で実施された農村調査にある。中国大陸の調査は、殖民地行政の機関である満鉄調査部が担っていた。満鉄調査部に属した調査員のなかには、戦後京都大学に移る清水盛光^(注11)のような家族社会学研究者も含まれていた。一方、東京大学から戸田貞三、林恵海、今井時郎らが参加し、調査助手として福武直も加わった研究は、興亜院から委嘱をうけたものであった。

4 日中戦争下における中国調査の主体は、満鉄調査部だけではない。興亜院は、もともと軍関係の特務機関の活動を継承（本庄・内山・久保 [2002：7]）したものである。またここから、委嘱されて調査に従事した集団は、多岐にわたる。福武の参加した東大グループも、そのひとつだった。

そこで、調査方法に着目すると、一筋の光明が差し込んできた。満鉄調査部は、あくまでも鉄道行政の立場から、定点観測的な統計調査を重んじなかった。これには、後藤新平の好みの問題だったという説もある。また、現地調査を重んじるあまり、文献調査を蔑ろにした。清水盛光¹の方法が、徹底して文献学的であったのは、満鉄の主流に対するアンチテーゼであったかもしれない。が、この報告では福武の行動と、かれが書いた報告書だけに着目することにしたい。

社会調査の歴史

ここで社会調査の歴史を振り返っておく。内容は主として『社会調査論』（原田・水谷・和気編、学文社）に拠る。広い意味での社会調査は古代からあった。エジプトではピラミッドの建設のために、労働力を把握するための調査が行われた。日本でも班田収授のために、戸籍の調査が行われた。生計を同じくする者たちをひとまとめにして括る、という概念もそのころからあった。現代の国勢調査に受け継がれている、世帯の概念はそれほどにも古い。

それらは、いずれにしても、時の権力者たちが、意のままに使える人的資源を把握するために、行われた調査だった。このような調査は、センサスと呼ばれる。センサス（census）とは、言葉の由来をたどると、古代ローマで行われた人口登録調査のことである。のちに用語として、国勢調査、あるいはそれに類する大規模な人口統計調査のことをいうようになった。

このような全数調査は、閉鎖的で同質性の高い共同体を形成するのに役立った。江戸時代、キリシタン禁制に端を発した寺請け制度と人別帳は、はじめは宗教政策として作成されたが、やがては民情把握のために利用された。

今日の社会調査に近い形態は、十九世紀のイギリスに現れた。社会改良家と呼ばれる人々が、都市に居住する貧しい労働者たちの衛生状態を改善する目的で、一連の調査を行った。

「貧困線」を発見して、年齢別に人口を把握することにより、貧困人口を割り出したB. S. ロウントリーなどがそうだ。

ジャーナリストたち

日本にも明治末年頃、産業化の陰で虐げられて生きる人々に光を当てる仕事が見れる。松原岩五郎『最暗黒の東京』（1893）、横山源之助の『日本之下層社会』（1899）、細井喜和蔵の『女工哀史』（1925=T14）、といった、「踏査型」のルポルタージュがそれである。これらは通常、記録文学として扱われることが多い。

これらは、調査者の意識としてはルポルタージュであり、社会調査という意識ではなかった。しかし、単に興味本位でもなく、都市の悲惨な状態に生きる人々の生活に光をあて、それを向上させたいという情熱に基づいたものであった。踏査型は、今日でも意味を失っていない。それは、時代の証言、人間の生き様を描いた作品としても、そうであるが、物語性という点でも重要と考える。今日でも、こうした系譜のルポルタージュは、書かれているし、読まれてもいる。

もうひとつ、要素をあげると、踏査型の調査は、調査する主体の冒険物語である。読者は、冒険者に感情移入することにより、未知の自分の体験として、異次元空間を生きるのだ。これに対して、質的調査に分類される、聞き取り調査によって、調査対象のライフヒストリーを構成する調査方法がある。こちらの方は、調査される側の、冒険物語である。読者はそこに、自己投影することも出来るだろうし、自己とは本質的に異なる他者を見いだして、対話することもできる。

踏査型の調査が英雄時代、黎明期の調査だったとすると、科学的な方法に基づく大規模な統計的調査が実施されるようになったのが20世紀のアメリカ合衆国であった。ことに1920年代に入ると、資本主義経済が発展し、大衆社会が出現する。そこで商品の販売予測に用いられる市場調査や、選挙結果を予測する世論調査が行われるようになった。入念に設計された質問紙に基づき、科学的な手続きによって抽出された標本を対象に実施され、結果は統計的に処理される。統計学を応用した社会調査は、日本では高野岩三郎が1916（大正5）年実施した「東京における二十職工家計調査」が知られる。福武の師である戸田貞三も、1933年の『社会調査』以来、アメリカ流の統計的社会調査法の紹介と普及に努めた。福武直は、統計的社会調査の時代を生きた研究者であった。統計的分

析を経てまとめられた調査報告書には、当然ながら冒険物語はない筈である。福武は生涯の終わりに『社会学四十年』という学問的自伝を遺した。しかも、著作集の増補改訂にあたっては自伝の方も増補して遺している。

第二章 日本の中国調査

後藤新平の影

戦前日本の「海外植民地」における調査というと、後藤新平（1857-1929）の名前を忘れることは出来ない。かれが関与したのは、台湾であり、東京市であり、満鉄であった。

後藤新平の生涯は近年、ことに着目されているのでここでは詳述しない。児玉源太郎陸軍中将（1852-1906、周防国都濃郡徳山村＝現・山口県周南市出身、のち陸軍大将）が台湾総督となった1898（明治39）年、かれは民政局長（のちに民政長官と改称）に抜擢される。調査機関として、1901年に臨時台湾旧慣調査会を設立。京都帝国大学教授で民法学者の岡松参太郎（1871-1921、満鉄理事を兼務）を招き、「台湾旧慣調査」を実施。1900年から1922年まで膨大な時間と費用を投入した。これは『台湾私法』（1909-1911）として刊行された。また、京都帝国大学教授で行政法学者の織田萬（よろず、1868-1945）を中心として、のちの京大教授狩野直喜（1868-1947、号君山）などとともに、清朝の法制度を研究、『清国行政法』（全六巻）として刊行した。このように、後藤の指揮した調査研究は、実地調査と文献調査の両方にまたがっていた。

南満州鉄道株式会社が設立されたのは、明治39年11月のことである。資本金二億円、そのうち一億円は政府から受けた財産であり、その内訳は、東清鉄道より譲渡された長春以南の鉄道と付属する土地建物などと港湾、撫順、煙台などの炭鉱を一億円と評価した。残り一億円は民間からの募集で、満鉄株は広く国民の間に分散して所有され、国民会社として親しまれる性格をもった。

満鉄設立は児玉源太郎が主導したことから、その児玉の推挙によって後藤新平が初代総裁に就任した。設立当初から設置された調査部の役割とは、土地問題の解決の為の「旧慣調査」であった。当時、清国では法体系が崩壊し、ちょっとした土地問題の解決も、できない状態にあった。そこで、問題を日中間の国際裁判に持ち込まぬよう、満鉄内部に日中の法慣習に通暁した人物を置いて、交渉に当たらせようというのであった。

満鉄調査部に関しては文献もあり、その複雑な調査方針の変遷についても分かっていることは多いが、ここでは割愛する。とりあえず、陸軍系の興亜院とは系統が違うからである。当初、後藤の構想では、満鉄調査部は軍事関係の調査も担う予定であった。ところが、軍事行動のための調査と、鉄道および満鉄付属地などの線状に伸びた地域の経営の為の調査とでは異なるとの理由から実現しなかった（上記の記述はリストにある文献の他、天野博之著『満鉄を知るための十二章』2009年弘文館に拠った）。

後藤新平の提唱によって1922年、創立されたのが東京市政調査会である（旧 財団法人 東京市政調査会。現 後藤・安田記念東京都市研究所）。当時東京市長の職にあった後藤は、政策立案のため中立的な調査機関設置の必要性を感じ、ニューヨーク市政調査会に範をとった機関を提案した。これに賛同したのが銀行家安田善次郎であり、350万円の寄付によって日比谷と本所の公会堂、および東京市政会館を建設した（同研究所HPによる）。

興亜院の調査

興亜院は1938年12月16日に発足した。1937年勃発した盧溝橋事件のあと、中国大陆における日中の戦争が、早期終結の見通しを失っていくなかで、「長期的建設」が課題となった。そのとき、陸

軍は、「占領地域につくられた対日協力政権（傀儡政権）への対応、経済、金融、国策会社の監督、文化工作、その他対華政策に関する一切の事務を包括するものであり、北京、上海、南京、青島などには現地機関を置き、当面は経済関係事務に当たらせる」（本庄・内山・久保〔2002：7〕）こと、つまり「中国侵略の推進拡大に向け陸海軍以外の省庁の協力も得ながら、なおかつ軍部が外務省の拘束を受けずに対華政策を推進していくため」（同）の機関創設をもくろみ、実現させた、それが興亜院であった。

こうして出現した興亜院の本院は東京におかれ、総裁は首相が兼任、4名いる副総裁は陸軍、海軍、外務、大蔵各大臣の兼任であった。実質ナンバーワンは総務長官で、初代は柳川平助陸軍中將が就任した（政務部長に鈴木貞一陸軍少将、経済部長に日高信六郎前上海総領事）。北京（華北）、張家口（蒙疆）、上海（華中）、廈門（廈門）に連絡部を置き、青島に出張所を設けた。本院よりも出先機関の人員が多いのが特徴であったが、各省庁からの出向者で占められていた。陸海軍と外務省出身者が多かった。大平正芳は一時、蒙疆連絡部経済課、および経済部第二課におり、農林省から出向した伊東正義は華中連絡部にいた。

興亜院の機能としては、軍の強力な介入権限を確保しながら、各省庁の所管業務の調整機能をもった。つまり、対中国占領地行政が、主な仕事だった。

やがて1942年11月に大東亜省が設置されると、興亜院は対満事務局、拓務省、外務省東亜局とともに吸収された。今度は軍人が減り、外務省と大蔵省出身者が主導権を握った。

さて、興亜院の実施した調査とは、どんなものだったのだろうか。久保亨は、「興亜院の調査研究活動の一つの特徴は、以前から中国の政情や社会経済の調査に従事してきたいわゆる調査マンタイプの人々ばかりではなく、それまで中国と必ずしも特別な関わりを持つことなく、日本本国の鉱工業、農林水産業、公衆衛生など様々な専門分野で実務に携わっていた相当数の自然科学系の専門家、官庁・民間企業の技術者らが組織され、それぞれの分野の主として産業技術的側面に関する精緻な調査が、非常に大きな規模で展開されたこと」（本庄・内山・久保〔2002：74〕）であると述べている。興亜院が存続した4年弱の期間に、1944点の調査報告書が出されたが、「文献調査だけに終始した報告書はむしろ稀であり、多くの場合、専門家による何らかの実地調査に基づく考察を含んでいた」（同）由である。

久保の論文によれば、福武が助手として加わった1940年4月、つまり昭和15年度の調査方針は、「世界情勢乃我方ノ対外関係等ヲ顧慮シ、特ニ重要国防資源自給促進ノ見地ヨリ、之カ開発利用ニ関スル基礎調査、並ニ之カ起業化及ヒ対日供給ニ必要ナル条件ノ調査ニ重点ヲ置クモノトス」とあるように、「国防資源」にシフトされており、昭和17年度になると、「各般基礎調査ニ関シテハ概ネ前年度ヲ以テ打切ル」とあって、基礎調査の打ち切り方針が示されている。久保の分析によれば、「東亜研究所に委嘱された『支那慣行調査』や京都帝国大学に委嘱された『大陸風土服合策調査』などは、恐らく上記のような観点から、当面、興亜院自身の調査計画からは除外されたものと考えられる」（本庄・内山・久保〔2002：78〕）のであって、福武が加わった調査も、そうした事情から、東京帝国大学社会科学部に委嘱されたものと推察される。

7

第三章 中国の福武直ⁱⁱ

第二回 農村調査

さて、第一回の中国調査を終えた福武は、1940年4月末に東京に帰ると、さっそく、第二回中国行きの準備にとりかかった。最初にしたのは、中国行きの前からてがけていたギャンプルの『北京の中国家族生活』の翻訳であり、急ピッチで仕上げて、7月始めには原稿を出版社に入れること

ができた。その一方で、写し取ってきた楓橋鎮全体の戸口調査表を集計し、次回の本格的調査のための調査票を設計した。そのためには、文献調査が必要であった。また既に、大学を卒業していたかれは、郷里の岡山で徴兵検査を受けた。結果は第二乙種だった。

第二回目の調査は、その年の7月24日神戸をたち、9月26日上海を出航するまでの、約二ヶ月間に及んだ。はじめに上海に着くと、満鉄上海事務所へ赴き、天野元之助に会った。天野はちょうど、『支那農業経済論』上巻の校正刷に手を入れていたところで、福武は「その豊富な引用書目は、かけ出しの私を圧倒した。そして、その倦むことを知らぬ精進に感じいった」（福武〔1976：49〕）と書いている。

今回の蘇州は厳戒態勢であった。呉県知事が暗殺され、城外にでることが出来なくなったのであった。ようやく8月10日すぎて、楓橋鎮の鎮長らと相談を開始できた。14日になって、「鎮長秘書のような仕事をしている中国人に、用意した調査票をもって各戸を訪問し記入してもらう約束をとりつけることができた」（福武〔1976：49〕）。福武は林恵海とともに、「現地で調査票の記入について指示し、以後調査を毎日継続してもらうことにした」。これは間接的な調査だった、「私たちも村に入りたかったが、通訳が得られなかった」。その後、二人は南京へ、中支建設資料整備事務所へ文献調査に行き、また蘇州に戻った。問題は、通訳の不足であった。「県や合作社の通訳のひまなときに、何とかたのんで同行してもらい、面接調査の進行をみとどけ、そのときにできるだけ資料をあつめてきて勉強するというのが関の山であった」（福武〔1976：50〕）。「そのうえ、訪問記入させた調査票には不備が多く、そのような調子ではよい結果は得られそうにないと不安になった」（同）。

九月に入って、杭州に赴き、文献調査方々、西湖の風景に焦慮を慰められた。再び、蘇州に帰って、「通訳借用の断続的調査が始められた」。「運よく通訳が同行してくれたときは、一寸の光陰も惜しいという気がして精力的に村の中を歩きまわり、少しでも見聞を広めようと努めた。……その後は、風邪を引いて声が出なくなったり、腹痛をおこしたり、皮膚病の痒みになやまされたりということで、体調はよくなかったが、それでも、何とか頼みこんで県公署の通訳をまわしてもらったり、時には同宿の留学生高倉正三さんの助けを借りたりして、何回か村に入った。しかし、農村調査の方は思うようにならず、主として、蘇州城内の同業会館、義荘、義倉、同郷会館などを訪ねまわり、筆談で聞いてくるという、側面からのおぼつかない調査で日を送った」（同）。「こうして、滞在二カ月に及んだ第二回調査も、十分な成果をあげることができないままに」終わることとなった」（同）。

第三回 農村調査

三回目の調査は41年3月、28日に蘇州着、「当初は調査実施のめどがなかなかたらず、村に出かけることができたのは四月の七日になった。しかし、今回は、大阪で育った中国青年を、調査期間中専属の通訳として傭うことができた。林さんと私は、九日から本格的な調査に入った。前回不備ながら面接調査をしてもらった調査票を基礎として、各戸を順次訪ねて確かめ、さらに関連事項を深く追求していったのである」（福武〔1976：56〕）。

- 8 治安は前回よりは安定していたが、「新四軍の勢力はつよく、日本が支配したのは、いわゆる点と線にすぎなかった」ことを痛感した。しかし、調査する村の人々とすっかり顔なじみになり、「私たちが調査以外に他意のないことを認めてくれた」。

「調査村へは、時に自動車で出かけたが、多くのばあい、城門外までバスに乗り、そこから人力車に乗りついで楓橋鎮についた。鎮につくと、茶館に大抵、世話をやいてくれる保長か甲長がお茶をのんでおり、にこやかに迎えてくれた。……彼らは、私たちが着いて一服の茶をのむと、すぐ立ちあがって村に入ることを常例と心得、一緒に村へかえって案内してくれた」（福武〔1976：57〕）

と、そんな毎日であったという。

調査は、ほとんど連日行われ、この国のあちこちで戦争の行われていることや、新四軍の軍事行動が付近の鎮でしばしば起こることを忘れさせた」（福武 [1976: 58]）。調査は、短い南京旅行を挟んで、連日行われ、5月21日にうちあげ、22日に蘇州を後にした。「旅行の日数からいうと、前回よりも少し短かったが、この回は、かなり充実した調査ができた。その限りでは、私は、みちたりの気持ちで東京に帰りついた。調査地の全戸数約二百戸を洩れなく訪ねて、戸別調査を完遂することができたし、幾分知識も豊かになっていたので、いろいろのことを聞き出すこともできたからである」（福武 [1976: 58]）と、調査の充実ぶりを記している。

帰国した福武は、「この年、……夏休みを返上して、調査の整理と分析の作業をつづけた。その作業の間に中国関係の本や、この初春から読みはじめた農村社会学関係の和書などによって、勉強をひろげていった。勉強すればするほど、問題はむづかしくなり、かなり努力したものの自信はつかなかった。戸別にあたった調査の結果、大分わかったと思った中国農村も、まとめにかかり、解釈してゆくうちに、わからないことが沢山出てきた。……七月には、旅行遠慮方の通牒が出た。九月になると、大学の卒業を十二月に繰りあげることが決定された」（福武 [1976: 59-60]）という、困難な状況のなかで、研究をまとめる仕事が続けられた。

この頃、福武が『帝国大学新聞』（八六八号、1941 / 9 / 8）に載せた「社会学時評」のなかで、次のように書いている。「又実証性ということを穿き違えて理論的研究を輕蔑し、好事家的或いは数字依存症の実証性に陥ってもならない。科学するものにとって大雑把な概括も危いが、同様に又何等の比較もせずして孤立せる特異性を誇張するのも危険であり、統計を統計以上に評価し数字の結果のみに安住することも却って数字を殺すことになるからである。要するに吾々がここで云ひたいのは、時局重大化と共に真に日本社会学が発展して行く為に、一言で云へば、日本的であり乍ら世界的でもあり得る様な着実なる研究が正しい学問的立場に立つ人々によってエネルギーに遂行されねばならぬといふことである」。ここに福武の調査方法論に対する考えの一端を知ることが出来る。

第四回と第五回

太平洋戦争開始の翌年、1942年、戦況の好転にあわせて、第四回目の調査旅行が可能になった。福武は、今度は興亜院の事務嘱託として、林恵海に同行した。調査は4月6日長崎を出航して上海に向かい、8日には蘇州に入った。途中、上海で飲んだコーヒーの味が、国内では乏しくなっていた本物のコーヒーのそれだったことに衝撃を受けたという。

「調査地は、清郷工作第三期になって、この四月から、楓橋鎮より分離し、獅山郷に編成替されていた。新しい通訳も手配されており、このときは早速調査を開始することができた。そして途中、比較のために常熟付近の農村も見に出かけた」（福武 [1976: 64]）。このときの調査の目的は、「整理分析の過程でわかった調べ残しの問題点を補正することが主な仕事」（同）だった。林が先に帰国したあと、長崎に帰着する5月6日までの一カ月間、調査を続けた。

帰国した福武は、調査報告をまとめながら、アメリカの農村社会学にも研究を広げ始めた。一緒に調査に行った林とは、学問上のことで意見が合わない場面も出てきた。福武はそのために、調査報告書とは別に、中国農村について著書の計画を立て始めた。

1942年9月、興亜院は大東亜省に改組された。翌年の8月5日、大東亜省事務嘱託として、福武は五回目の中国調査に出かけた。上海への航路は危険ということで、下関から朝鮮半島は釜山に入り、北京に直行した。北京に滞在し、石漢線にのって華北の農村を見にでかけた。徐州、南京を経

て、17日に蘇州に入り、29日に立つまで、「調査地や上海で補足調査をした」。

「このときの調査は、物価が大変高騰していて、それまでにくらべ金銭的には苦しかった。調査村の保長たちから、逆に御馳走してもらったほど」であった。戦況が悪化していたためであろう。それでも1943年9月4日に下関に帰着するまで、調査は続けられた。「この最後の調査は、華中農村に関するかぎり、特に収穫があったわけではない。文字通り補充調査にすぎなかった。しかし、華北の農村を実見できたことは、私にとって非常に大きな勉強になった。後に華北農村についてまとめたときにも、この実地見聞が、調査資料を読みとるばあい、イメージとして頭に描くことを可能にしたからである」（福武 [1976: 67]）。と書いていて、『中国農村社会の構造』の後半部にあてられた華北農村社会の研究に役立ったことがわかる。

その後の調査旅行

これが海外（文字通りの）との最後の遭遇という訳ではなかった。43年10月には、日本社会学会の大会が京城で開かれた。ひとつ前の関釜連絡船が撃沈されるという状況のなかで、無事、京城に到着し、「中国農村における家族と同族」と題する報告を行った。このとき、水原郡烏山面外三美里という村落を見る機会があった。「初めて朝鮮の農村にふれた。この村で、私は、中国以上に儒教的喪礼が保持されているのをみて大変印象深かった」（福武 [1976: 69]）とするすと同時に、「いつかは中国の農村と比較したいと思ったが、それは果たされないままになった」（同）とも、書いている。

また、1944年3月下旬には、学術研究組織という組織の中国班を担当することになった戸田貞三とともに、新京に向かい、大山彦一^(注12)を訪ねた。天津を経由して北京に入った。「北京では、三年後輩の伊藤章さんを介して、北京大学農村経済研究所を訪ねた。その翌日、私は、ひとりで、北支経済調査所を訪ねて杉之原舜一さんに会い、『北支慣行調査資料』をもらった。……この資料の一部をもらったことが、華北の農村についてまとめる機縁となったのである」とあって、『中国農村社会の構造』成立の事情を知る上で貴重な証言である。

このときの旅行の記憶は、福武はあまり確かでないようである。錦州から、馬車にゆられて内蒙古の視察調査にでかけた。「先輩岡村精一さんの世話になり」とある。「村での聴取調査は、戸田さんの問題関心であった親族呼称を中心として行なわれたが、その内容に立ち入ることができないほどに、すべてを忘れてしまった」とある。下関帰着は4月8日。

44年、7月にサイパン陥落という戦況の下、大東亜省の委嘱をうけた林恵海に随行し、福武は、病弱の故に兵役免除になっていた二人の学生とともに、満州開拓村の調査に出かけた。「十月一日新京についた。そして、四日から、新京、興安、哈拉爾、齊々哈爾、……黒河、北安、佳木斯、千振、林口、永安、牡丹江、ハルビン、吉林と、月末まで満州を一巡して多くの開拓団を訪ねた。出身や構成が異なり、入植年次も違う開拓団は、入植地の条件も加わって様々であった。集団生活で開拓した後の集落形成の仕方にも相違があった」（福武 [1976: 80]）。福武は、戦後のこれら開拓団の悲惨な運命に思いを寄せ、見聞の内容については書くに忍びないという。

『中国農村社会の構造』について

福武の五回にわたる中国農村調査の成果を収めた『中国農村社会の構造』が刊行されたのは、1946年の秋のことだった。「しかし、これを書いたのは、敗戦の色が濃くなっていった一九四四（昭一九）年から四五（昭二〇）年にかけてであった」。つまり、戦争のさなかに書かれた。

「中国農村社会の研究を、自分なりにまとめてみようと思いついたのは、一九四三（昭一八）年の

二月初ころであった。その仕事は、『中支農村の社会構成』という題目で、農村調査における見聞と書物での勉強をもとに、華中農村についての一般論を記述しようとするものであった。これが本書の前半部分に相当する。「現地調査の報告そのものは、林さんが刊行されることになっており、それは『華中江南農村社会の研究』〈上〉^(注13)として出版された。私も、調査結果を若干資料として利用させてもらったが、調査報告書の形をとらないで書き上げるように努めたわけである」(福武 [1976: 81-82])。

上の引用のように、本書は調査報告書そのものではない。しかし、五回にわたる調査を通して、福武がどのように中国農村社会を把握したか、あるいはそう努めたかについては、調査代表者(林恵海)によって書かれた公式の報告書より、はっきり表れているといえよう。

本書の構成

『中国農村社会の構造』が対象とするのは、華中と華北との農村社会の構造である。華北については、『北支慣行調査資料』に基づく、純然たる文献研究である。ここでは華中について見よう。著者自身によれば、「第一章に於いて吾々は華中農村の社会生活を基底的に制約している諸条件について述べる。そしてこの基礎的諸条件の上に営まれる華中農村社会の構造分析は第二章に於ける社会諸集団の解明から始められ、この集団の論述に次いで之等の諸集団の全体的結合構造と農村内の社会的分化の様相とが第三章に於いて論ぜられる。かくて農村社会の内部的構造の考察の後に、第四章は農村の対外的な関係の究明にあてられる。而して最後に吾々は以上の分析の総括的結論として第五章に於いて、華中農村社会の社会的性格を論究して本稿の考察を閉じるであらう」(福武 [1946-1976: 38-39])とある。

総合社会学への志向

福武は「緒論」において、「吾国のシナ学」が「中国の科学的研究」という点において欧米よりも立ち遅れている現状を批判している。そうして、本書に記した「華中江南三角地帯の農村といふ極めて限定された対象の分析」を、「広く適用されるべきもの」として一般化し、その科学的研究を発展させる志を表明している。

社会学とは、福武によれば「吾々は人間の社会的共同生活を研究する科学を社会学と考えるのであるが、この社会的共同生活は、政治・経済・宗教・教育等から離れて存在し得るものではない」(福武 [1946=1976: 29])。そこで「吾々が求めるものはこの社会学的方法に基いた社会学的研究なのである」(同)。「この社会的共同生活は、政治・経済・宗教・教育等から離れて存在し得るものではない。人間の営む政治的生活も経済的生活も宗教的生活もすべて社会生活なのである。かうした性質の中に社会学の対象的曖昧性が指摘され非難される点があり、学問論的に社会学を基礎づけるに困難なる事情が存するのであるが、兎も角社会生活は人間が政治的経済的宗教的に他の人間と交渉して生活することであり、純社会的なるものが経済的なるもの政治的なるもの宗教的なるもの等から遊離して存在するのではないのである」(同)。引用の末尾に「註1」が付される。引用が長くなるが、続けると、「従って社会学は之等すべてのものを包摂しなければならず、そこで取扱はれる人間は単なる法律人でも経済人でもなく全き意味に於ける社会人即ち所謂全人であらねばならない」(同)。ここでさらに「註2」が付されている。

まず「註1」についてみると、「純社会的なものを具体的な状況から抽象して追究したものは形式社会学であった。その誤謬はここに指摘するまでもない」(福武 [1946=1976: 30])。とある。形式社会学とは、コント、スペンサーら社会学の創設者たち、「第一世代」と称される人々に続く「第

二世代」の社会学者G. ジンメルの提唱した方法論である。『現代社会学辞典』（2012、弘文堂、本項目執筆奥井智之）によれば、「19世紀終盤から20世紀初頭にかけて、個別科学としての社会学を志向する気運が高まってくる」なかで、ジンメルは「社会を、人々の相互作用の産物ととらえ、その『社会化Vergesellschaftung』の形式を分析する学問として、社会学を再規定した。ジンメル自身、『社会化』の形式をめぐる対概念＝結合／分離、上位／下位、闘争／融和などを駆使して、卓抜な社会学的施策を展開した。のみならず、彼の着想は、以後の社会学に脈々と受け継がれている」と評価されているのであり、福武のようにこれを「誤謬」とする評価は見当たらない。ではどうして、福武はこれを「誤謬」としたのであるのか。

いうまでもなく、それは「註2」が付された文章を正当化するためであって、そこでは、社会学は「純社会的なもの」と「具体的な状況」とを共に引き受けるかたちで「全き意味に於ける人間即ち所謂全人」を対象とするべきことが強調されている。

では「註2」にはどう書かれているか。「社会学が漠然と総合社会学に陥る危険はここにある」と福武はいう。というのは、「社会全体即ち全人を志向しつつもその認識成果は、剩すところなく全人を掩ひ尽すことは出来ない」なぜなら、「社会科学はすべて一つの認識論的立場からの認識であり、社会学もこの点決して例外」ではありえないからである。ここで言われているのは、社会学が他のすべての社会科学の認識論的立場を総合してしまうことは不可能だという意味である。

「この意味に於いて、新明正道教授の総合社会学的立場に対しても吾々は多大の共感を覚えながら、而も全的に賛意を表し得ないのである」。ここで福武は総合社会学に対する共感を示しながら、「全的な賛意」を否定するという矛盾を表現している。その結果、「吾々は言葉の技巧が許されるならば、社会学は社会の全体的認識であって全体認識ではないと考へるのであって、あく迄社会学は人間の生活の共同なる認識点よりする科学的認識であるとする」という、自覚に裏付けられた矛盾的立場を表明するのである。

「総合社会学」は元来、さきの「形式社会学」の立場から、その前の時代の社会学を批判的に名指して用いられた呼称である。しかし、「形式社会学」以後の時代に、「文化社会学、歴史社会学のように、社会事象を具体的に観察しようとする蛍光が強まるとともに、これを見直し再評価する気運が生じてきた」と、1958年有斐閣版『社会学辞典』（編者に福武も名を連ねている）において、新明門下の内藤莞爾は指摘する。

この新しい総合社会学は、「諸文化、諸社会形象の関連を追及する点」にその特徴の一つが存するのであり、「このような理解の仕方は、社会生活についての機能的考察をすすめるとともに、社会生活を全体として捉え、諸文化、諸社会形象を、この全体の積分的部分として眺める必要を痛感させる」とある。内藤はマルセル・モースの「総体的社会事実」の觀念にその代表的な例を見、K、マンハイムにも同様な意図が窺られるという。

つぎに我が国に於ける総合社会学として新明正道をあげ、新明が「社会の全体的認識は、社会哲学をまたず、科学の立場において可能である」としていると指摘した上で、「総合社会学には二つの途」があり、ひとつは「抽象的綜合化というべきものであって、ここでは社会諸事象の全体が対象とされ、これらを通じて存在し、かつその本質とみられるものが問題とされる」という。これは甚だわかりにくい表現であり、社会学というよりは哲学的な思索に接近している印象がある。しかしここで、さきほどの福武の「註2」に帰ってみれば、「社会学は社会の全体的認識であって全体認識でない」という言葉に即して理解できそうである。

内藤はさらに、「内包的綜合化ともいうべき」もうひとつの総合社会学をあげている。これは「社会諸事象の具体的な全体関連を把握しようとする」であって、モースの「記述的一般社会学」がそ

の例にあたるとしている。(モースの「記述的 descriptive」については検討しなくてはならない。)

が、ともかく福武は、内藤の挙げた「第一の途」でもって、総合社会学に見切りをつけたように見える。ところがさらに一步譲って見方を変えると、「社会哲学を待たず、科学の立場で……」という点に活路を見だして、戦後社会科学の文脈で「科学＝マルクス主義」に対して、総合社会学に求めても得られなかった途を求めたようにも思われる。

否、事實はすべて逆であるのかも知れない。福武の『中国農村社会の構造』の分析手法には、マルクス主義的な社会観、歴史観の影響が強く見受けられる。福武は、日本がまさに敗戦を迎えつつあった時期に、総合社会学への共感を語りながら、いわば総合社会学を隠れ蓑にして、マルクス主義を取り入れたのではなかったか。

さきほどの「註1」および「註2」の付された文章に続く部分で、福武は次のように述べている。「社会学の観点は、人間に於ける生活の共同なる面に置かれるという点に於いて、他の諸社会科学の認識焦点が社会的現実の或一点に注がれそれが全体に拡大されるのとは異なり、最初からその全般に汎るのであって、この意味に於いて社会学は社会諸科学中に特殊な位置を占める」(福武 [1946=1976:30]) といい、「法律学や経済学が相互に交叉しつつも夫々の認識の中心点の故に対象を平面的に分つものに対し、社会学は之等の対象面の全体に現れる人間の生活の共同を認識課題とするために、諸他の科学と対象を言はば立体的に分つのである。……社会学こそはその特殊の立場の故に、最も具体的に全人性を把握せんとする科学である」(同) ともいう。

社会学は社会諸科学の中での優越性をもつ。法律学や経済学が、確固とした科学であるのに対して、社会学は後進性、脆弱性をもつ。否、社会学こそが社会諸科学に対して優位に立つという。これは新明にもない、「百科全書的」と評された初期の総合社会学の立場である。

次に、農村社会学とはなにか。「農村における生活を社会的に研究するに際して、所謂農村社会学なるものが、他の経済生活宗教生活から独立し遊離した形に於いて存在するものと考えられるのではない」。それは経済のみならず、政治も宗教も、教育も、あらゆる生活面によって、作り出される集団や組織を対象に、「その実態を究め、この全生活面に於ける農民の生活の共同の様態並びにその共同を成立せしめる条件とそれによって惹起される結果とを研究するもの」である。

そこに描き出される農村人とは、「それは一定の条件の下に合理的に経済的活動を営み、地方自治行政の支配下に於いてその法律や慣習に縛られた農民であると同時に、血縁的感情を持ち強度に愛情を感じ隣保相扶け多くの農村の伝統や迷信の如き非合理的の行為型の中に生活する人間」であり、「そしてかかる人間を構成的に再現するものこそ農村社会学であって、それは生きた農民の営む生活の理論的構成であると言うことが出来よう。吾々が本稿で意図するところは、実にこの点にあるのである」とする。

ところが、農村に関する研究でも、中国に関する研究でも、社会学的研究は、まだまだ少ない状況にあった。いずれにしても、農業経済学的研究は甚だ多いのに比べて、「ここに中国農村社会の社会学的研究という一つの大きな課題が吾々に課されていると言えないであらうか」と投げかけるのだ。「之迄吾々に与えられた中国農村の社会学的考察が、中国社会全般の理論の中に包摂的に述べられたものか、或いはその一項として記述されたものかの何れかであり、精緻であり乍ら展望的である様な社会学的研究が少なく、又多くの実態調査に於いても農村社会構造の解明を直接目的としたものが稀であるために、以上の課題は極めて困難なのである」としている。したがって、社会学的な分析を中国農村社会に対して行うことは、「或る程度未開拓の分野を探索すること」だと言っている。

「緒論」の文末で福武は、これが中国農村一般について概説しようとしているのではなく、「極めて限定された華中の而も江南デルタ地域の農村」を対象としたものであること。および、かれが「本

書の分析に於いて実証と理論との相即を重視するものであること」を言明している。

これこそまさに新明の「第二の途」であり、「descriptive」、つまり、いたずらに「何故」を問いのではなく、「いかにあるか」を社会諸事象と理論との相関において位置づけていく総合社会学を、福武が志したことの表明ではないだろうか。しかし、そのような読み方は、実は報告書である『中国農村社会の構造』と『回想』とをあわせ読むことによって、可能になってくる。

文献と社会事象

さて『中国農村社会の構造』において、福武等の行った現地調査によるデータは、文献資料による研究と補完し合う関係にある。それは幾多の例によってみることができる。

一例をあげれば、農家の副業の普及状況について、「満鉄の調査に於いて、常熟県では専業農家は僅かに一三・二%にすぎず、太倉県では四七戸中二一戸約四四・七%が副業を行ひ、松江県では六一戸中三二戸即ち五二・五%は兼業或は出稼農であり、又嘉定区では八二戸中六一戸七四・四%が副業をもつ農家である。吾々の呉県楓橋鎮の調査でも一五四戸中六三戸即ち四割余は兼業農家であり、之等の農家の七割迄は経営耕地五畝以下であった。従って吾々は、大体農家の半数内外が副業に従事していると考えることができる」(〔:82]) という箇所がある。ここでいう満鉄の調査とは、満鉄上海事務所編になる『江蘇省農村実態調査報告書』である。

副業の割合からは、農家の職業的分化の実態が把握できる。ところで、農村における社会集団の分化には、相続に依る家産の分化もある。中国の農村の特徴は、徹底した均分の鉄則が貫かれる。福武等は、江蘇省崑山県自漁郷における「生分証書」、江蘇省呉県い山郷の「母による分産証書」など、幾つかの証書を蒐集し、「分産の徹底的な合理性」を確認している。「均分は徹底的に行われており、土地の方分等も一見不均等の如く見えても、土地の生産力の優劣、田底面の分産当時の評価等を考慮すれば決して不均等ではなく、土地は均等に分けられるために畦を作り乃至は木を植えたりなどして迄細分して配与される」(福武 [1946=1976:116]) ことを確認している。土地の分産の限度は確定できないとしながらも、「農民達は如何に猫額大の土地といえども徹底的に分散すると言っている。そして極農貧に於いて、も早分産することによって一家の生活が支え切れなくなる場合も原則としては分けられる。無論事実上或限度を超えると分産は不可能となるが、この場合は兄弟の共同耕作が行われることは出来ず自然に他に職を求めて他出し、土地を得たものが之に金で補償し或は租金を納めるという形で解決される」としている。これは戒能観通孝の所説への反論であり、O. FrankeやR. F. Johnstonの指摘の確認でもあった。

こうした分析が準備していたものは、「中国社会に適用される村落共同体、農業共同体、農村共同体等の緒概念」に適用することによって、「一定の発展段階として論ぜられる」ためであり、……、従来中国農村について論ぜられた之等の緒概念を一応回顧し検討しなければならない。そしてそのことは、同時に吾々の理論への手掛りともなるのである」という。福武は、マルクス、サンダーソンの理論について検討し、「以上の如き概念規定から見て華中農村は村落(郷村)共同体ではない」と結論づける。その理由として、「それが農民の生活の自的に行われる地域集団ではないからである」と述べられている。「即ち農村民の生活関心は農村内のみでは満たされず、外社会特に市鎮との結びつきが極めて多面的であり、その意味で高度に解放的であったのである」と説明されている。村落共同体でないとすれば、どうなるのか。とりあえず、マルクスの発展段階説には当てはまらない、というだけの結論ではあった。

こうして一応、福武が、文献調査と現地調査とを併用し、現地調査をもって理論的考察の結果を再検討する、そういう思考様式を持っていたことは分かった。

もっとも、福武のいう理論というのは、自然科学の「論理実証主義」的な理論ではない。それはウェーバーのいう理念型、理念理論であった。

おわりに

福武が中国で調査した村については、戦後、日中国交回復後に訪中した社会学者が、同地を訪れたときの記録がある（著作集月報）。それによると、福武等は現地の人々に受け入れられた様だ。しかし、こうした人々との出会いは、戦後の福武の活動とは無縁であったから、考察の範囲外とする。

日中国交正常化以後、福武は何度か、訪中団の一員として中国に渡っている。多くは団長に推されている。制約が多く、不自由な環境のなかで、なんとか当時の中国の姿を伝えようと、コーディネーターとして活躍する様は、学術的とは言えないが、旅行記に遺されている。

福武はほかにも、機会をみつけて、海外に飛んでいる。インドの農村社会も調査している。これらは、限られた予算のなかで、限られた人員によって担われた。かれらは、少ない機会を利用して、また膨大な専攻研究の蓄積に、実体験を交叉させる場を演出することによって、現下の社会の姿を留めようと目論んだのであったようだ。

福武の戦後が、戦中のこの書物に込められた考察と反省を機動力として、押し進められて行ったことは、想像に難くない。戦中に組版を作成しながら、出版は戦後となったと言われているが、マルクスの理論に当てはめて、発展段階説に位置づけようとする試みなどは、いわゆる危険思想であったはずだ。しかしこれを、総合社会学であるとすれば、それはいちおう、筋が通っているようにも見えたはずだ。こう考えてくると、総合社会学とは何だったのだろうか、再考する可能性が見えてくる。本稿はそのような発想に基づいて、その一端をスケッチしてみたものである。

林恵海が執筆した調査報告書との突き合わせ、福武の戦後に展開した調査研究との比較など、今後の課題としたい。

とかく現代社会に目が向きがちで、先人達の歩みには無関心な社会学の、日本に於ける歴史を、日本人の思想の歴史として跡づけていく試みを続けていくつもりである。

【註】

(0) 引用は新字新かな遣い変換した箇所がある。また時代の表現として、今日では適切と思われる用語をのこした場合がある。以下同様。

(1) 卒業論文「社会学的認識における客観性の問題——没価値性と存在拘束性」のこと。1939年度東京帝国大学文学部社会学提出。

(2) 今井時郎（いまい ときお、1889：明治22～1972：昭和47）は、宮城県石巻市出身。父彦三郎は第一高等学校漢文学教授。東京帝国大学文科大学哲学科（社会学専修）卒業、ロシア留学。20年帝大助教授、41年9月教授。同月東京市教育長に転出。戦後は東京学芸大学教授等歴任。社会格概念を提唱。著書に『社会誌学研究法—露西亜社会誌第1分冊—』（1929）ほか。

(3) 林恵海は、山口県美祢郡西厚保村の寺の次男に生まれる。東大社会学科卒業。1938年「北支に於ける日支蒙民族の協和工作に関する実情調査」のため、中華民国へ出張。1939年から43年にかけて、東大助教授時代に6回中国へ出張。テーマは「中支郷村社会の実態調査研究」。44年には満州国へも出張。「開拓農家聚落構成の実情調査」。戦後48年東大教授。1985年没。人口論、人口社会学の研究を深めた。

(4) 福武直（1917：大正6～1989：平成元）は、岡山県吉備郡大井村大字大井（現在は岡山市北区大井）に生まる。第六高等学校を経て、東京帝国大学文学部社会学科卒。大学院および特別研究生を経て1942年助手、1959年教授。

- (5) 牧野巽(1905: 明治38~1974: 昭和49)は東京帝大社会学科卒。東大副手を経て、東方文化学院研究員時代の35年と39年に中国北部、満州、朝鮮および、台湾、廈門、広東を旅行。43年民族研究所員。中国の家族・親族・法典史、古代社会経済史、中国周辺諸民族の研究に従事。49年東大教育学部教授(日本初の教育社会学担当)。中国家族研究の第一人者。
- (6) 元々の名称は「対支文化工作」であり、戦後の表記に従って「対華」と言い換えている。これは「支那」の名称が中国に対する蔑称であるとの認識に基づき、国号である「中華民国」を用いたもの。
- (7) 戸田貞三(1887: 明治20~1955昭和30)は、家族社会学の創始者。東京帝大社会学科卒、アメリカ留学。1929年東京帝大教授。1933年日本で初めて調査方法論を体系化した『社会調査』を出版。1929年には台湾で、32年には満州で、それぞれ一ヵ月にわたる現地調査を実施。1931年から、鈴木栄太郎、滝川政次郎との共同研究「分家慣行調査」をはじめとする組織的な実態調査に着手した。
- (8) 松本潤一郎は当時、東京文理科大学教授。
- (9) ハンス・フライヤーの『現実科学としての社会学』は後年、翻訳を完成。1944年に青山書院より刊行。
- (10) カール・マンハイムの『変革期における人間と社会』は1953年にみすず書房から刊行。
- (11) 清水盛光は1904: 明治37年~。広島市出身、陸軍幼年学校卒、士官学校在学時に病気で士官候補生被免。九大で高田保馬の教えるを受ける。九大卒業後満鉄調査部勤務。47年京大人文科学研究所に入る。49年京大教授。関西学院、駒沢大学等歴任。満鉄入社以来、中国社会研究。『支那社会の研究』(1929)、『支那家族の構造』(1942)、『家族』(1953)、『集団の一般理論』(1971)。文献学的研究を重んじた。
- (12) 当時、満州建国大学で民族学を講じた。満州民族学会を主催。
- (13) 林恵海、1953『農村社会制度研究: 中支江南. 上巻』有斐閣を指す。

【引用文献】

- 林恵海、1953『農村社会制度研究: 中支江南. 上巻』有斐閣
- 川合隆男、2004『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣
- 川合隆男・竹村英樹共編、1998『近代日本社会学者小伝・書誌的考察』勁草書房
- 九学会連合対馬共同調査会編、1954『対馬の自然と文化』古今書院
- 蓮見音彦、2008『福武直 民主化と社会学の現実化を推進』東信堂
- 原田勝弘、水谷史男、和気康太編著、2001『社会調査論』学文社
- 福武直、1946=1976『中国農村社会の構造』(『福武直著作集 第九巻』所収) 東京大学出版会
- 1976「社会学四十年」(『福武直著作集 別巻』所収) 東京大学出版会
- 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編、2002『興亜院と戦時中国調査 付 刊行物所在目録』岩波書店
- 山田豪一、1977『満鉄調査部 栄光と挫折の四十年』日本経済新聞社

(受理 平成26年11月29日)